

# 異世界へ誤召喚

されちゃいました

著 モーリー

女神の加護で  
ほのほの  
スローライフ  
送ります



# CHARACTER



## クロノス

時空神と呼ばれる女神。  
蓮たちを異世界に  
誤召喚した張本人。

## ユグドラシル

女神に生み出された精霊。  
異世界での案内役で、  
植物からなんでも  
作り出す能力を  
持っている。

## リル

世界に一体しかいない  
伝説のフェンリル。  
威厳ある見た目だが、  
食いしん坊で桜の料理  
には目がない。



## サクラ 桜

御剣家の高校生の長女。  
兄を慕っている。  
女神から授かった魔法の  
能力は蓮が目を見張る  
ほどの実力。

## レン 蓮

本編の主人公。御剣家の  
長男で、異世界で  
心機一転、三兄妹での  
スローライフを  
目指す。



## ヒマワリ 向日葵

御剣家の幼稚園児の次女。  
好奇心旺盛で天真爛漫。  
蓮にも桜にも  
溺愛されている。



## 第一章

僕は、御剣蓮。

社会人三年目の二十四歳。

春眠暁を覚えず。

寝心地のいい気候の中、僕はその言葉通りベッドで布団にくるまり睡眠を堪能していた。

「ひいちゃん！ ダーイブツ！」

ドゴッ！

「おぼっ!?」

元気な声をあげながら僕のお腹に飛び乗ってきたのは、今年五歳になる年の離れた妹の向日葵。  
うつろう……い、息ができない……

気持ちのいい時間が生死を彷徨う時間に変わるなんて……

「にいに！ お！ は！ よ！」

ひまちゃん——向日葵は明るい表情と声で僕を呼んだ。

「ひ、ひまちゃん。お、おはよう……も、もう少し優しく起こしてくれると嬉しいな……」

僕は痛みに耐えながら、息も絶え絶えの中、絞り出すようにしてそう言った。

僕たちは二十歳も年が離れているし、ひまちゃんはいつも愛嬌溢れる明るい表情をしているため、僕は溺愛しすぎて強く叱れない。

「蓮兄！ そろそろ起きないと遅れるよお！ あ、起き……た？」

その声をかけてきたのは、高校二年生の妹の桜。

悶絶する僕を見て、起きたのか死んだのかを怪しんで疑問形になったみたいだ。

桜は容姿端麗で頭脳明晰。

運動は得意ではないが、家事全般もこなせる超ハイスペックな美少女。

他校から見に来る男子が後を絶たないほどモテるらしいが、僕にしてみればその男子たちに殺意を抱いてしまう。

僕は蹲りながら桜に向けて親指を立てて、辛うじて生きていることを示した。

「ひいちゃんがおこしたの！ えらい!？」

ひまちゃんは自慢げな表情で桜にそう聞いた。

「うんうん。偉いよお。そして可愛いよお」

ベッドで蹲る僕をよそに、桜はひまちゃんを抱き締めながら褒めると同時に愛でるように頬擦りをした。

妹たちの楽しそうな表情を見るたびに、絶対にこの笑顔だけは守るという気持ちが込み上げる。

なぜなら僕は、この家の世帯主にして、桜とひまちゃんの保護者だからだ。

僕の産みの母親は、僕が幼い頃に他界した。

その後、中学三年生のときに父親が再婚して、そのときに連れ子としてやってきたのが小学一年生の桜だった。僕が大学二回生の時にひまちゃんが産まれたのだが、僕が社会人になってすぐに父親と継母が旅行中に飛行機事故に遭い、この世を去ってしまったのだ。

以降、僕が保護者となり、僕たちは三人だけで支え合って生活している。

「蓮兄は今日も遅いんですよ？ ご飯作っておくから温めて食べてね。はい。こっちはお弁当」

僕の回復を待ってから移動したりビングで、桜はそう言いながら、職場に持っていくお弁当を手渡してくれた。

「くうう。可愛くて心配りまで出来て……なんていい妹なんだ。いつもありがとう」

「毎日泣かないでよ。可愛いのは否定しないけどね」

桜と僕は血のつながりがない。

しかし、出会って間もないときからずっと兄として慕ってくれる大切な妹だ。

「本当にいつもありがとうね。もつと好条件の所に転職できるように頑張るよ！」

僕が桜にそう言ったのには訳がある。

なぜなら僕が新卒で入社したのは不運にも、超がいくつあっても足りないほどのブラック企業だったのだ。

僕はその営業部に所属している。

パワハラ、モラハラは当たり前。

定時は十八時だが、なぜか二十一時から始まる会議。

終電を逃すのが日課になりつつあり、社員の中には職場に泊まる猛者も現れ始めているが、僕は妹たちとの時間を少しでも増やすために、終電を逃しても帰宅できるように自転車通勤をしている。僕は産みの母親を亡くしたショックを忘れるために違うことに没頭しようと、小さいときから剣道や空手を習って体を鍛えていたため、人一倍身体が丈夫なのがせめてもの救いだ。

「桜の料理は最高だからね。今日も一日頑張るぞお！」

「私たちのために働いてくれてありがとう。でも、無理はしないでね」

「ひいちゃんも！ ひいちゃんも、ようちえんがんばる！」

僕と桜の話聞き、ひまちゃんは無邪気に力こぶを作っけて見せてきた。

ひまちゃんは、僕の父と継母——つまり桜の産みの母との間に生まれた子。

僕にとつても桜にとつても血のつながった大切な妹だ。

天真爛漫てんしんらんまんで自由奔放じゆうほんぱう。無邪気で愛嬌があり、誰からも好かれる性格をしている。

御剣家の中心的存在だ。

「ひまちゃんもありがとう」

僕はそう伝えながらひまちゃんを抱きあげた。

ひまちゃんは預かり保育を利用しながら、幼稚園へ通っている。

飛行機事故はひまちゃんが二歳のとき。

当時は毎日泣き続けていたが、今では泣いていたことも、そして両親のことも多くは覚えていな

いようだ。

僕も桜も、ひまちゃんが寂しい気持ちにならないように、ことあるごとに抱き締めたり、頬擦りをしたりして、愛情を伝えることが癖くせになっている。

幸せをこれ以上壊さないために、そして妹たちを守るために、僕が頑張るしかない。

そう心に誓う日々だ。

ブーブーブー。朝の幸せな時間の邪魔をする着信がスマホからなる。

「蓮兄。電話なってるよ」

「ああ。この時間の電話なら大丈夫だよ」

出勤、通学前の朝早い時間。

この時間になる電話は一つしかない。

両親の事故の賠償金を狙っている親戚どもの電話だ。

そのお金は妹たちの将来の為に手つかずのままにしてある。

奴らは朝、昼、晩と毎日連絡してくる。

投資の話を持ちかけた銀行からの電話ですら昼と夕方の二回だというのに。

まったく……熱心なことだ。

「交流なんて全然なかつたくせに……」

クスどもが……

「蓮兄……」

「大丈夫。適当に対応しておくから任せときな」

桜と呼ばれて自分が顔をしかめていることに気がついた。

桜は察しがよく、優しい性格だから要らぬ心配をかけたくない。

「さあ、今日もみんなでがんばるぞー！」

「おー！」

僕が無理やり暗い雰囲気を変えようと声を張りあげると、ひまちゃんはいつも無邪気に乗ってくる。

よかった。

ひまちゃんの楽しそうな様子を見て桜の表情も明るくなった。

「よし！　じゃあ今度のお休みはみんなでピクニックでも行こっか」

「やったー！　びつくにつく！　びつくにつく！」

ひまちゃんは感情が動きに出るなあ。

リズムも振りつけもいつも独創的。

うん。うん。うちの子は可愛い上に天才だな。

「暖かくなってきたしいいかもね」

桜もピクニック案に賛同してくれた。

ピクニックといわず、異世界にでも行けたら……

上司にこき使われることもない。

意味不明なパワハラも残業もない。

親戚からの鬱陶しい連絡もない。

そんな現実逃避の妄想が頭を過った瞬間。

俺たち三人を挟むようにフロアリングと天井から光り輝く模様が浮かびあがった。

ゲームや漫画で幾度となく見たことのある魔法陣に形が似ているが、僕は考えるのをやめてすぐ

さま妹たちの方に動き出した。

「掴まれ！」

「きゃあ！　なにこれ!？」

「にいに！　ねえね！」

考えている暇はない。

僕は咄嗟に妹たちを抱き寄せたが、為す術もなく、光が僕たちを包み込んだ。

目を開けると、僕たち三人は何もない白い空間にいた。

「大丈夫か？」

僕は二人にそう尋ねる。

「う、うん。たぶん……」

「ひつく……ひつく……」

桜は「うん」と答えてはいたが不安そうにしているし、ひまちゃんは泣くのを必死で我慢している。

何が起こったのかは全然分からないけど、桜とひまちゃんに怪我はないようでひとまず安心した。僕がすっかりしないと。

そう思い、かける言葉を探していると、後ろから声が出た。

「驚かせてしまいましたね。どうか落ち着いてください」

優しく聞き心地のいい綺麗な声。

振り向くとそこには、純白のドレスに身を包んだ美しい女性がいた。

淡い黄色の長く美しい髪に淡い水色の瞳。

純白のドレスから見える細い腕と豊満な胸。

綺麗……って見惚れてる場合じゃないぞ。

とにかく妹たちを守らないと。

僕がそう思ってた妹たちの前に立つと、ひまちゃんが後ろで小さく呟くのが聞こえた。

「おひめさま？」

ひまちゃんの言葉も頷ける。

でもなんというか……もつと神々しいというか……女神……？

「私はクロノス。今、ご想像されている女神に相違ありません」

心を読まれた!?

でも怖い感じはしないな。

ひまちゃんに微笑んでるし……悪い女神じゃないのかもしれない。

「女神様が何の御用でしょうか？」

心が読まれてる以上、詮索は無意味だ。俺は女神にそう質問した。

「この度、皆さんは今までは異なる世界に召喚されることとなりました」

聞けば、クロノスさんは時空神と呼ばれ、世界を管理している女神の「柱」なんだとか。

僕たちの世界では使用されていない魔素と呼ばれるエネルギーを異世界へ送り込むため、数百年に一度くらいの頻度で、僕らの世界の住人を異世界に召喚や転生させているらしい。

「異世界では魔法や錬金など様々な形で魔素が消費されます。皆さんの世界にたとえると火を使うと酸素が消費されるようなものです。同じように植物など自然の力で、少しずつ魔素は回復するのですが、消費が大きく魔素の回復に時間がかかることがあります。そのような場合は、緊急措置として、魔素を消費しない世界の人を召喚や転生させることで世界の壁に穴を開け、異世界へ魔素を送るのです」

そして今回、僕たちは異世界に存在する肉体に精神のみが送られる転生ではなく、精神や肉体ごと異世界に召喚されるというのだ。

「なぜ僕らを？」

僕はクロノスさんに尋ねた。

だって人が急にいなくなれば騒ぎになる。

生きた人間を異世界に送るよりも、死んだ人間の精神を異世界へ転生させる方が、色々と影響が少ないはずだ。

「ご……です……」

ん？ なんだ？ 何て言ったんだ？

「え？ すみません。時空神様。聞き取れませんでした」

「誤召喚ですう！ ごめんなさああい！」

僕が尋ねると、クロノスさんは涙を流しながら、はつきりとした口調で答えた。

「ごしようかん……？」

誤召喚!? こいつ今、誤召喚って言った？

桜を見ると、僕同様にややキレ気味の表情を浮かべている。

幸か不幸か、僕と桜の心を読んでしまったクロノスさんは、怯えながら説明を始めた。

「ほ、本当はお亡くなりになられたご両親の魂を転生者として異世界へ送る予定だったんです。死後、魂が転生に適応できる状態まで少し時間がかかります。今回は時期を見計らって行ったのですが、ご両親の魂があまりにも強く皆様のそばにいらっしやっただので、照準を誤ってしまっただけ……なるほど。」

照準を誤って僕たちに合わせてしまったのか。

誤召喚と言った意味は分かっていたけど、とんでもないことになってしまったな。

「ギリギリで、なんとか転生ではなく召喚に切り替えたのですが、止められてなくてですね……」

クロノスさんがそう言うと、桜が近寄って冷徹な微笑を浮かべたまま尋ねた。

「どういうことですか？」

一瞬しか表情は見えなかったけど、これはかなり怒ってるときの表情だな。

たぶん「戻れないとか言ったら容赦しないぞ。この駄神が……」とか考えてるんだろなあ。

普段大人しい人が怒ると怖いっていうのは本当だ。

「ひいひい！ ごめんなさああい！ もうしませんからあ！」

さらなる悲鳴をあげるクロノスさん。

「もうしませんっていうか、もう一回あつてたまるかよ……」

僕は呆れながら思わず声に出してツツコミを入れてしまった。

そこから、クロノスさんは桜にこっそり絞りに絞られ、登場したときの神々しさも威厳も雰囲気もロボロボと崩れてしまっている。

もはや駄女神だ。

しかし、いくら文句を言っても召喚される事実を変えられない。

僕たちが異世界に行くことは確定事項のようだ。

転生じゃなくて召喚なのがせめてもの救いだな。

別の生物になったり、姿形が変わったりすることはないらしい。

間違いを犯した張本人のクロノスさんと他の女神たちが話し合った結果、謝罪として、僕たちには女神の加護や高ステータスなどの特典が与えられることとなったそうだ。その説明も兼ねてこの場を設けたのだという。

「本当にごめんなさいい」

トテトテテ。

泣きじゃくりながら謝り続けるクロノスさんのもとに駆け寄る足音が響いた。  
「いいいいいこ。こわいことないよ」

そんな状況を見かねたひまちゃん、ひまちゃんが近寄り、クロノスさんの頭を撫でたのだ。  
幼稚園児に慰められる女神など前代未聞だろう。

「うう。女神様あああ」

クロノスさんがひまちゃんに向かってそう言った。

女神に女神認定された幼稚園児も前代未聞だ。

おそらく人類史上初の快挙だろう。

「僕としては異世界に召喚されてもいいんだけど……」

ブラック企業での社畜。

そして金の亡者どもの相手。

僕にとって元いた世界は、戻れるとしても戻りたい場所ではない。

僕は桜とひまちゃんがそばにいるなら、異世界でもどこへでも行く覚悟を決めた。

「わ、私は……ううん。私も蓮兄とひまちゃんがそばにいるなら大丈夫」

桜には何か言いたいことがあったのかな。

言葉を読み込んだようにも見えたけど……

でも今聞いても元の世界に戻るわけじゃないしな。

何を言おうとしたのかは機を見て聞こう。

「ひまちゃん。これから新しいお家にお引越しすることになったよ」

僕がそう伝えると、ひまちゃんは普段の明るく可愛い顔からは想像もできないほどに嫌そうな表情を浮かべて答えた。

「え……やだ……」

心優しいひまちゃんならば「だいじょうぶだよ」と言ってくれるのではないかという駄女神と化したクロノスさんの期待を裏切り、ひまちゃんは簡潔に答えた。

「おともだちあえないの……？ ひつく……」

そう言ってひまちゃんは目いっぱい涙を浮かべた。

御剣家には五つだけ絶対破ってはならないルールがある。

通称、五大禁忌。

その中の一つ。

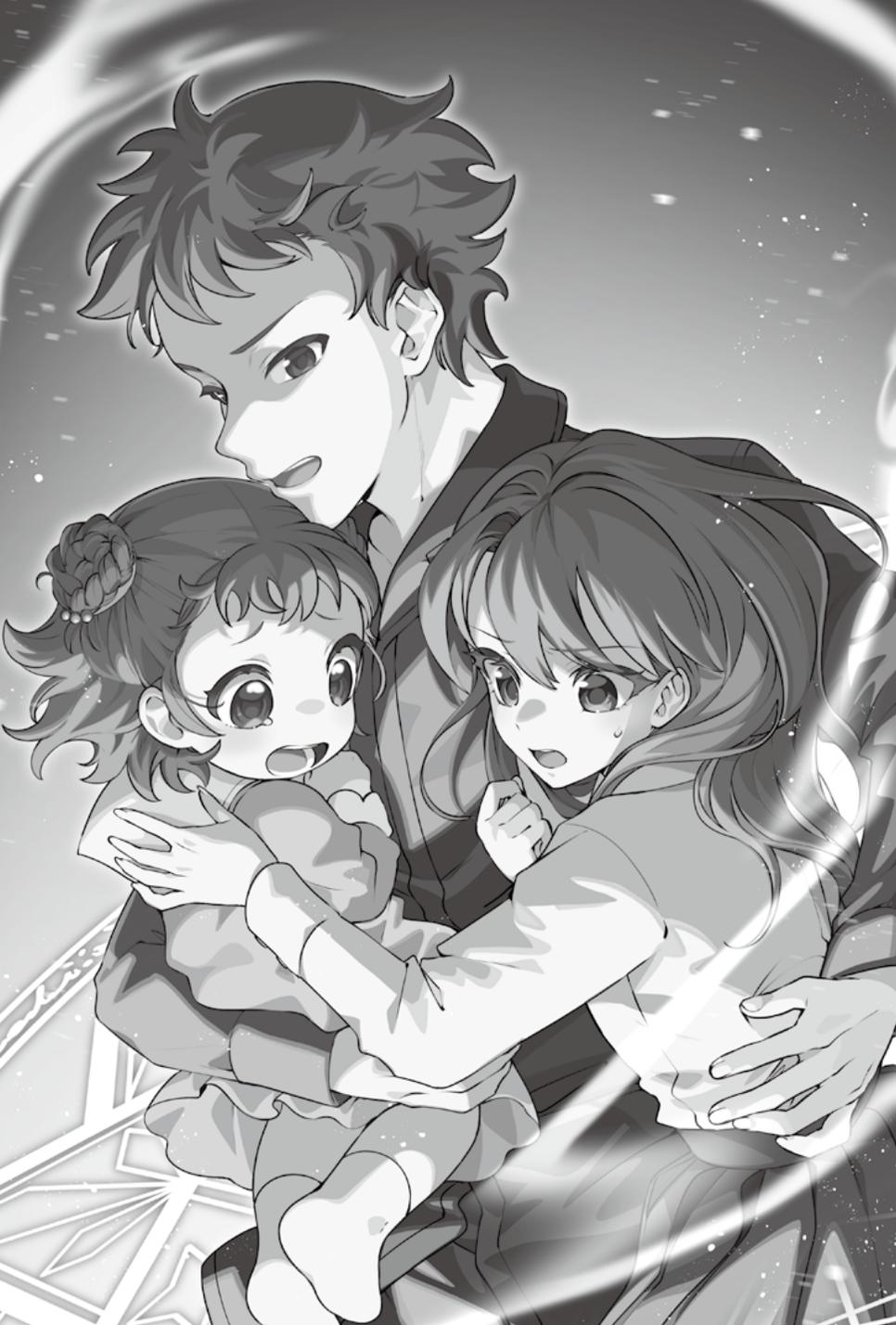
『家族を悲しませるな』にクロノスさんは抵触した。

ここでいう家族とは主にひまちゃんのことだ。

涙を浮かべるひまちゃんを見て、僕と桜は純然たる怒りを込めてクロノスさんに視線を向けた。

「お、おおお、おお、おおお、お友達は私が用意するから！ すっごく優しく強いお友達をすぐ用意するから！」

僕たちの心を読まずして脅威を察知したクロノスさんが叫んだ。



「すっごくやさしいけど、すっごくつ・お・いの!？」

「九死に一生きゅうしにいつせい。いや、万死ばんしに一生いつせいを得るチャンスと言わんばかりにクロノスさんはたまたみかけた。

「そ、そそそ、そうよ! すんごく強いんだから! もうね、最強だから! 絶対安心! 一緒にいて超楽しい!」

「つおくて、たのしいの!？」

女神と言えど誰かに怒られるのは怖いらしい。

「そ、そうなの! だからお願い! もう、本当に一生のお願い!」

クロノスさんはそう言いながら今まで見たことのないほど綺麗な土下座をし始めた。

「んー。そっかあ。じゃあいいかなあ」

ひまちゃんは何やら想像してニヤニヤしている。

クロノスさんの命懸けの願いが届き、ひまちゃんの機嫌が直った。

「ありがとうございますう!」

僕と桜の「次、泣かせたら許さないからね」という心を読んだのだろう。

混じり気のない、心からの感謝を伝えながらクロノスさんは額ぬでを床につけた。

もはやどっちが女神か分からない。

「どこにいても三人一緒なら大丈夫。僕が必ず守るから」

僕はひまちゃんを抱きあげ、桜に寄り添いながら言った。

「うん」

「あい！」

覚悟を決めると、この空間に来たときと似た魔法陣が発動し、光が徐々に強まった。

「向こうについたら、すぐにお友達を向かわせますのでご安心ください」

僕たちはクロノスさんの言葉を聞きながら、再び光に包まれた。

それから少しして、目を開けると僕たちは大自然の中にいた。

目の前に広がるのは美しい湖と草や花。

周辺は白神山地を彷彿させる、木々が生い茂る大自然。

「綺麗……」

桜は壮大な自然を見て感動したのか、言葉を漏らした。

「ぶーるだあ！」

湖を見てはしゃぎだすひまちゃん。

「ちよっと待ってねえ」

危ない危ない。しっかりと抱っこしておこう。

ゲームやラノベのような世界なら湖にモンスターがいるかもしれない。

近づいて襲われでもしたら……

「すぐに最強のお友達が来るらしいから待つてようね」

僕はひまちゃんに向かつてそう声をかけた。

ひまちゃんからすると、異世界じゃなくて自然の多い公園に遊びに来たのと変わらないんだろうな。

「湖の水がこんなに綺麗なら飲めるかも。そしたら水の心配はなくなるね」

僕がそう桜に話しかけると、桜は「そうだね。魚とかがいたら食料も一旦は大丈夫だね」と冷静に

答えた。

桜は……落ち着いてるな。

いや、僕もか。

なんだか頭が冴えている。

次に僕は耳を澄ませた。

動物の鳴き声や鳥の羽ばたく音などは何も聞こえない。

微かに聞こえるのは川のせせらぎと、見慣れない草木が微風で揺れる音だけだ。

「周りには何もいないようだね」

家族三人が揃ってるんだから、慌てずに安全と衣食住、日用品の確保をする方法を考えよう。

僕があれこれ考えていると、風が吹き、木の葉が舞った。

「お待たせいたしました。レン様、サクラ様、ヒマワリ様です」

そう言っ木々の葉吹雪の向こうから現れたのは、新緑の葉でできた髪をなびかせている淡い緑の

瞳の女性。

ピンクの花と緑の蔓や葉の柄が描かれた白く美しいシンプルなワンピースを身に纏っている。

それにしても胸が大きい。

目のやり場に困る。非常に困る。

「そうです。優しくて強いお友達というのはあなたですか？」

僕はその女性の胸などまったく気にしていないという顔で答え、質問を返した。

落ち着け。

気取られるな。

目を見て話すんだ。

視線を逸らすな。

「はい。私は植物の精霊。名をユグドラシルと申します」

落ち着いた優しい声と表情をしているからなのか、返事を聞く前から敵ではないと思っていたけど、どうやら思い違いじゃなかったみたいだ。

「ようせいさん？」

「ふふふ。妖精族とは少し異なる存在です」

妖精族？

この世界には人間以外にも色んな種族がいるのかな？

「皆さまをお守りするように料理神フローラ様から命を受け、参りました」

「クロノスさんじゃなくて？」

僕はユグドラシルさんにそう尋ねた。

「はい。料理神フローラ様は植物や豊穰など食に関するすべてを司る方です。私はフローラ様に生み出されました。植物を生み出したり操ったりすることができます。この世界の案内役だけでなく、衣食住の全ての面で皆さまのお役に立てるため、適任ではないかとお選びいただきました」

聞けば、ユグドラシルさんは植物魔法を操り、家や家具、草木で衣類を作ることも、必要な野菜を生み出し育てることも可能だそうだ。

これは最高の人選。

いや神選かもしれない。

「たとえばこのようなこともできますよ」

そう言ったユグドラシルさんは、地面を隆起させて大地や山を地面に描き、植物で彩り、地図を描いていく。

「おお！」

これが魔法なのだろうか。

「この世界の名はテルセニアといいます」

ユグドラシルさんによれば、今いるのはルークス大陸の上部にある湖の左側辺りだそうだ。

「街までは結構遠いんですね」

「本当だね。なんでこんな大自然の中に召喚させられたの？」

俺がそう質問すると桜も気になっていたようで後に続く。

「はい。皆さまがピクニックに行きたいと話されていたのでこの地にしたと、時空神クロノス様か

らうかがっております」

たしかに、家でそんな話をしていたのは間違いない。  
でもここまでの大自然に来るとは思わなかったな。

「この近辺きんぺんに怖い動物とか生き物いきものっているんですか？」

「どうぶつ？ すみません。少し失礼しますね」

僕が質問すると、突然ユグドラシルさんがひまちゃんと額をくつつけ始めた。

何をしているんだろう。

「ひいちゃん、おねつないよ？」

「ふふふ。お熱はありませんでした。皆様は、この世界とは随分ずいぶんと異なる世界から来られたのですね」

熱を測はかったんじゃないやなくてひまちゃんの記憶を読み取ったのかな？

それなら話が早い。

「僕たちのいた世界との違いを軽く教えてもらえると助かります」

僕の言葉にユグドラシルさんは頷うなずき、簡潔に説明してくれた。

大きな違いは三つ。

魔物と種族と文明だ。

元いた世界でいう動物や昆虫という概念はなく、そのような生き物は全て魔物と呼ばれている。

ユグドラシルさんの言っていた妖精族の他にも人族、エルフ族、ドワーフ族など様々な種族が存

在するらしい。

そして、こちらの世界では魔法が使える分、機械や科学といった文明は未発達のようなのだ。

聞けば聞くほどに剣と魔法のファンタジー世界だ。

やばい。

ちよつとクロノスさんに感謝してる自分がある。

「まほう??？ ひいちゃん、まほうつかいななの？」

「そ、そうかもしれないね」

早く魔法を使いたいけど、安全と生活基盤きばんの確保が先だ。

「先ほどの怖い生き物はいるのかという質問に戻りますが、まずはご不安をなくすためにステータスを見ていただくのがよいかもありません。皆さん、ステータスオープンと心の中で念じてみてください」

ステータスオープン。

僕はユグドラシルさんに言われるがままそう念じた。

するとファンタジーゲームで見覚えのある青い半透明の画面が目の前に現れた。

ゲーム好きにはたまらないエフェクトだ。

「おおー！」

「わ、すごい」

「ひいちゃんも！ ひいちゃんも！」

〔レン・ミツルギ Level…1 人族♂ 24歳〕  
【ステータス】

生命力…15000/15000 魔素量…1500/1500  
闘気量…10000/10000

筋力…1800 防御力…1600 気力…1900

魔力…500 魔抗力…500 知力…500

敏捷性…1000 器用さ…400 幸運…1000

【加護】戦闘神アレスの加護、鍛冶神ヘパイストスの加護

【ユニークスキル】鑑定、アイテムボックス

【パッシブスキル】身体強化Lv3、危険察知Lv3、直感Lv3

【アクティブスキル】剣術Lv8、体術Lv7、武術Lv7、錬金術Lv1、鍛冶Lv2、話術Lv5、交渉術

Lv5、解体Lv1

【適性】水Lv1、火Lv1、風Lv4、雷Lv2、闇Lv4、支援Lv1

【装備】パジャマ

「だいたい見て分かるんですけど、魔素量と闘気量ってなんですか？」

「あ、私も思った」

ステータスを見て僕と桜が質問するとユグドラシルさんが答えてくれた。

「各項目は後ほど詳しくご説明しますね。今知っていたきたいのは各ステータスの値が高いことと、女神様の加護を授けられていることです」

筋力1800って高いのかな？

基準が分からず、僕は尋ねることにした。

「この数値は一般よりも高いんですか？」

「はい。現時点で人族の中で剣聖や英雄と呼ばれている者に並んでいます」

え？ 最強クラスってこと？

レベル1で？

「レン様が少しレベルをあげたり経験を積んだりするだけで、レン様を倒せる魔物は世界に数体、多くても十数体程度になるでしょう」

あれ？ 僕大丈夫？

比較対象が人間じゃなくて魔物だけになってるんですけど。

「レン様。加護の項目を押してみてください」

「あ、はい」

僕はユグドラシルさんに言われ、加護の項目を押してみた。

おお！ これは便利だ。

押すと項目の詳細が出てくるんだな。

### 【戦闘神アレスの加護】

- ・ 戦闘系スキルの性能上昇 (大)
- ・ 戦闘系スキルの成長加速 (大)
- ・ ステータス成長率上昇 (大)
- ・ 状態異常完全無効

### 【鍛冶神ヘパイストスの加護】

- ・ 生産系スキルの性能上昇 (大)
- ・ 生産系スキルの成長補整 (大)
- ・ 生産物の追加効果発生確率上昇 (大)
- ・ 素材の入手確率向上 (大)

「ここまでの加護を授かる者は、私のように女神様に生み出された存在だけです。一部の女神様に選ばれし者でもここまでの加護はありません」

ステータスの好待遇こうたいぐうに加えて、加護による補整もかなり大きい。

これだったら怯えて生活する心配はなさそうだな。

「なんでクロノスさんの加護はないんだろう……」

「そ、そうだね。張本人なのにね」

「ク、クロノス様は加護ではなくユニークスキルを皆様に授けていらっしやいます！」

僕と桜の疑問を聞いて、ユグドラシルさんが慌てている。

思った通り、ユグドラシルさんにとって女神は上司のような立場なのだろう。

フオローするのに必死な感じだ。

えつと……ユニークスキルは鑑定とアイテムボックスか。

「か、鑑定はステータスを見れるだけでなく、物体の詳細も確認できるスキルですが、皆様が授かったクロノス様特製の鑑定はどんなものでも鑑定ができます！ 同様にクロノス様特製のアイテムボックスは制限なく入りますし、中に入れたものは時が止まり保存できますので、二つとも役立つなんて次元のものではありません！」

たしかに、どちらも生活する上ではかなり役立ちそうなスキルだ。

少し大きさに説明している辺りに、ユグドラシルさんの優しさと気配りを感じる。

ユグドラシルさんも大変だな。

「スキルは皆様のご経験が反映されており、これから成長したり増えたりします」

確かに僕のスキルは剣道や空手、営業職の経験を汲み取ったような項目が多い。

鍛冶と錬金術は、日本刀に興味を持って構造や作り方を調べたり、一度は刀鍛冶を試してみたいと強く思っていたりしたから、女神様がその気持ちを含んでくれたのかもしれないな。

「適性という項目はその名の通り、魔法の各属性への適性を十段階で表しています」  
つまり僕は魔法の適性が低いってことか。

風と雷がレベル4で雷がレベル2なのがせめてもの救いだな。

他は目も当てられない。

「魔法も得意にしてくれたらよかったのに……」

「接近戦向きなだけで、魔法がまったく使えないわけではありませんのでご安心を」

僕が魔法の適性の低さにがっかりしているのを察したユグドラシルさんは、優しくフォローしてくれた。

優しい方だな。

「頑張つて鍛えます」

僕は、ユグドラシルさんの言葉を聞いて、剣道と空手に没頭して身体と精神をとことん鍛え、腕試しの喧嘩に明け暮れていたときのことを思い出した。

「懐かしいな……久しぶりに血が騒ぐかも」

「蓮兄。大丈夫？」

猛りが表情に出ているのだろうか。

桜が心配そうな顔をしている。

「あ、ああ。ごめんね。ちよつと考えごととしてただけ」

僕は慌てていつもの明るい表情に戻して答えた。

「ひいちゃんもお！」

「うんうん。桜もひまちゃんもステータスを開いてユグドラシルさんに色々教わろうか」

危ない危ない。

桜たちの前では誠実な兄のイメージを崩さないようにしないと。

「すてーたす！ おーぶん！」

声に出さなくてもいいんだけど……ひまちゃんなら可愛いからいいか。

〔サクラ・ミツルギ Level：1 人族♀ 16歳〕

〔ステータス〕

生命力：3000 / 3000 魔素量：21000 / 21000

闘気量：2000 / 2000

筋力：200 防御力：150 気力：100

魔力：1300 魔抗力：600 知力：1000

敏捷性：250 器用さ：1000 幸運：1000

〔加護〕魔法神マリーンの加護、料理神フローラの加護

〔ユニークスキル〕鑑定、アイテムボックス

〔パッシブスキル〕危険察知Lv3、直感Lv3

〔アクティブスキル〕料理Lv10

〔適性〕全属性Lv10

〔装備〕制服

「サクラ様も素晴らしい数値ですね」

桜のステータスを見てユグドラシルさんは感心している。

「この加護の所を押せばいいんだよね……」

そうやって桜はさっきの僕と同じように加護の項目を押して詳細を開いた。

【魔法神マーリンの加護】

- ・魔法系スキルの性能上昇（大）
- ・魔法系スキルの成長加速（大）
- ・ステータスの成長率（大）
- ・状態異常完全無効

【料理神フローラの加護】

- ・料理の成功率上昇（大）
- ・料理の追加効果発生確率上昇（大）
- ・料理の追加効果性能上昇（大）
- ・食材の入手確率上昇（大）

「これもすごいんですね？」

「は、はい。女神様たち……奮発されていますね……」

どうやら桜の思い違いではないようだ。

というか奮発具合に、精霊であるユグドラシルさんでさえ若干引いている。

すると桜がユグドラシルさんに質問する。

「ス、スキルが少ないし、魔法なんて使ったことないんだけど、私大丈夫なのかな？」

「ご安心ください。これだけ優れた加護があれば、練習すればすぐに様々な魔法を使えるようになります」

桜が尋ねるとユグドラシルさんは、安心させるように優しい口調で答えた。

どうやら元いた世界で魔法を使用した経験がないからアクティブスキルに魔法関係のスキルが表示されていないだけで、すぐに習得して項目が増えるらしい。

「それに適性が全て最高値だなんて……魔法について学べば、いずれ私に並び立つかもしれない」

「よかったあ。足を引つ張つたらどうしようって不安だったんだあ」

え？ 桜がすげない？

足引つ張るところか精霊並みに強くなっちゃうの？

魔法がそんなに使えない僕でさえ最強クラスって言われてたのに。早くも兄としての威厳が……ちよつとへこんでいる僕を気にも留めずに桜がさらに質問する。

「料理の追加効果って何ですか？」

「サクラ様が作ったお料理を食べれば、回復したり、ステータス値が上昇したりするということですね」

栄養補給だけでなく、ステータス補整などの追加効果があるとは、本格的に桜の料理なしでは生きていけなくなりそうだ。

勉強が得意だった桜は魔法向き。

運動ばかりしていた僕は接近戦向き。

本当に経験が反映されてるんだな。

「にいに！ なんてかいてるのお？」

「おっごめんね。ひまちゃんのも今見るねえ」  
ひまちゃんのステータス画面を見て僕は目を疑った。

〔ヒマワリ・ミツルギ Level 1 人族♀ 4歳〕

【ステータス】

生命力…100/100 魔素量…500/500  
闘気量…200/200

筋力…35 防御力…50 気力…35

魔力…350 魔抗力…80 知力…350

敏捷性…60 器用さ…80 幸運…7777

【加護】創造神エマーテルの加護、運命神フォルトゥナの加護

【ユニークスキル】鑑定、アイテムボックス、自由奔放

【パッシブスキル】愛嬌Lv10、癒しLv10

【アクティブスキル】絵画Lv1

【適性】水Lv5、火Lv5、風Lv5、氷Lv5、地Lv5、雷Lv5、光Lv5、支援Lv10

【装備】制服

え？ ひまちゃんが一番やばくない？

加護の欄に知らない神様の名前が書かれている。各属性への適性レベルも高くて、種類も僕より遙かに多い。

「っ!？」

ほら、もうユグドラシルさんが桜のとき以上に驚いてるじゃん。

「そ、創造神様が加護をお与えになるなんて……」

創造神って大体神様の頂点だよな。

僕は思わず桜と顔を見合わせてしまった。

「ひ、ひまちゃん。創造神エマーテルの加護の所を押してみても……」

「あー!」

僕の言葉にひまちゃんは大きく返事をして、加護の詳細を開いた。

【創造神エマーテルの加護】

・完全自動障壁(極) ・完全自動反撃(極) ・状態異常完全無効

【運命神フォルトゥナの加護】

・幸運 ・良縁

幸運のステータス値が異常なのは、確実にこれのおかげだ。

良縁はとてもありがたい。

それにしても自動の障壁に、自動の反撃ってひよっとして……

「ユ、ユグドラシルさん。ひよっとして、創造神様の加護ってとんでもない効果なんじゃ……」

「は、はい。おそらくお察しの通りで無敵と思われませう」

僕がユグドラシルさんに尋ねると、ユグドラシルさんは頬を引きつらせながら答えた。  
うん。察してる。

兄妹の中で僕が最弱なもの、もう察してる。

「で、でも！ ひまちゃんが怪我と病気の心配がないっていいことだよな」

「そ、そうだと！ 健康が一番だからね！」

桜もうすうす僕の魔法の弱さに気づき始めているのか、僕を慰めようと必死だ。

そのフォローが助かるような悲しいような。

「ユニークスキル欄にある自由奔放ってなんだろう。ひまちゃん。ここも押してみてくれない？」

「はい」

僕が言うと、ひまちゃんは明るい声で返事をしながら項目を押した。

### 【自由奔放】

・時折り理や法則を覆す

どういうスキルなんだろう。よく分からないな。

僕は尋ねようと思つてユグドラシルさんを見た。

「す、すみません。自由奔放については私にも分かりかねます。ただ、理や法則を覆すなどの女神様にも出来ないと思います……創造神エマーテル様がお与えになったのか、ヒマワリ様が生まれ持ったスキルなのか……」

ユグドラシルさんでも知らないユニークスキルなのか。

でもまあ悪く働くことはないだろう。

今は深く考えないでおこう。

「ひいちゃんっおい!？」

ひまちゃんは自分の能力についてよく分からなかったようで、僕に聞いてきた。

「う、うん。強い強い。っていうか最強だよ」

「わ、私たちも頑張らないとね」

桜の言う通りだ。

末っ子の妹に守られるのは流星に兄としても姉としても立つ瀬がない。

大まかなステータスを確認し終わったところでユグドラシルさんが詳しい説明を始めた。

「それでは基本ステータスの各項目を少しだけ説明しますね。上から順にまずは生命力。これはダメージを負うと減り、0になると死んでしまいます」

ちなみにユニークスキルの鑑定を使えば、敵のステータスも見られるそうだ。

そのときにステータスが表示されれば生きているが、死んでいれば死体と表示されるため、敵が本当に死んでいるのかを見抜くことができるらしい。

「次に魔素量。これは、魔法などの魔素を消費するスキルを使用すると減ります。0になっても死にませんが、ある程度回復するまで吐き気やめまい、激しい頭痛などに襲われます」

魔素はマナとも呼ばれることがあるらしい。

「そして、闘気量。体を動かしたり、剣技など闘気を消費するスキルを使用したりすると減ります」

0になっても死なないが、魔素切れと同じような症状に見舞われるようだ。

スタミナの役割に加えて、ゲームや漫画などでよく見るオーラや気のような役割もあるらしい。

「筋力と防御力はなんとなくわかるんですけど、気力って何ですか？」

「それは闘気を操る力のことです。気力が高ければ高いほど、闘気を使用したスキルの威力や効果が高くなります」

ユグドラシルさんは僕の問いに簡単に答えてくれた。

「気力が闘気を操る力なら、魔力は魔素を操る力ってことですか？」

桜は自分のステータスを見て魔法向きだと知ったからか、魔法に関わりそうな魔力という項目に関心を示してユグドラシルさんに尋ねたみたいだ。

「おっしゃる通りです。各属性への適性レベルが高ければ高いほど、魔素を効率よく変換して魔法を発動できるのですが、魔力とは、その発動する魔法の威力や効果を高める力のことです」

そしてユグドラシルさんは「後ほど魔素や闘気を使う練習をすればもっと理解しやすいかもしれません」と言葉が続けた。

「この魔抗力っていうのは、敵が放った魔法に対する防御力ってことですか？」

「はい。レン様のおっしゃる通りです。知力、敏捷性、器用さ、幸運については、言葉通りの項目ですので、説明は省きますね。次にパッシブスキルは常時発動型のスキルです」

たとえば、僕のパッシブスキルの身体強化は、何もしなくてもそのままステータス値へ反映されている。

もともとの体の強さ以上に、僕の筋力や防御力の値が桜よりも明らかに高いのはそのためらしい。

「逆にアクティブスキルは意識的に発動するスキルとなります」

剣術スキルのレベルがあがれば、より巧みに剣を操れるようになっていたり、攻撃の力加減が上手くなったりするようだ。

魔法も練習して覚えると『水魔法Lv1』という風に、アクティブスキル欄に記載が増えていくらしい。

「最後に適性です。これは自分がどの属性に適性を持っているのかを示しています。先ほど少しお話ししましたが、各属性に対する生まれ持った適性ですので、レベルがあがることはありません。適性レベルが高いほど、その属性の魔法を上手く扱えるようになります」

魔法の属性は全部で十一種類。

水、火、風、氷、地、雷、闇、光、支援、結界、時空。

その中でも、時空と結界の魔法を使える者は、かなり少ないそうだ。

桜は、各属性への適性が全て最高値。

それに加えて、膨大な魔素量と高い魔力まで持っているため、全ての魔法を最大限の強さで使用することが可能になるそうだ。

気にしないでおこうと思っても、桜の才能は羨ましいな。

「闇ってどんな魔法があるんですか？」

僕の適性レベルでまだまじだつたのが風と闇だつた。

風の魔法はなんとなく想像できるけど、闇の魔法のイメージがわかず僕はユグドラシルさんに尋ねた。

「私は適性がないので使えないのですが、闇の中に引きずり込むものや影の刃で切り裂くものがあつたはずですよ」

闇に引きずり込んだり影の刃を出したりする魔法か。

ただ僕は、魔素量も少ないし、魔力も低い……

いい使い方を見つけないとな。

「肝心のレベル自体は……やっぱり戦えばあがるんですか？」

僕はユグドラシルさんに質問を続けた。

「はい。対象を絶命させれば相手の命が自分自身に流れ込み、流れ込んだ命の量が一定値を超えるレベルがあがります」

やはり、レベルアップにおいて戦闘は免れないようだ。

「戦っている人のそばにいただけでレベルがあがることはないんですか？」

「多少の経験にはなるのであがらなくはないのですが、実際に戦闘することに比べれば、レベルアップするまでにかかる時間がかかりますね」

実践と見学と座学では、得られる経験値に差があるのは元の世界と同じようだ。

ゲーム世界のように敵を倒すのを見ていただけで多くの経験値をもらえるわけじゃないんだな。

つてことは素振りをしたら剣術スキルのレベルはあがるし、ステータスもあがるけど、僕のレベルは1のままってことか。

「命を奪ったらレベルがあがるんだつたら、ひまちゃんにはずっとレベルをあげずにいてほしい気もするね。何の命も奪わないでほしいっていう感覚がこの世界の感覚とは、ずれてるのかもしれないけど」

「うん。私も蓮兄と同じことを思った。でも大事にしたい感覚だね」

僕の言葉に桜も同調する。

元いた世界との感覚差を早く埋めていかないとな。

桜たちが早くこの世界に馴染んで、幸せに暮らせるようにする。

それが兄として、そして保護者としての責任だ。

「僕と桜がひまちゃんよりも先に強くなったり、色々覚えたりして教えてあげられるようにならな  
いとね」

「うん！ 兄妹パワーで頑張ろう！」

桜の兄妹パワーというあどけないワードが微笑ましい。

桜もまた高校二年生だもんな。

しつかり者のように見えて、まだまだ幼い一面を残している。

なんともかわいい妹だ。

「この後は…鍛えて危険に備えたいけど、先に寝泊まりする場所の確保をしようか」

「うん！ そうだね！」

僕の提案に桜は大きく頷いて返事をした。

時計がないため、今が何時か分からないが、明るさからして午前中だろうか。

時間の感覚や、曜日感覚。

季節の移り変わりの有無。

この世界の人々の働き方や生活水準。

色々知りたいことは多いが、とりあえず生きていく上で必要なこと以外は全て後回し。

「よし！ とりあえず元気なうちに、服や靴、家や寝床、トイレの用意を済ませよう！」

「おー！」

といってもそれらの用意はすべてユグドラシルさん頼みになるんだけど。

ステータス画面にも、もろに出ていた装備品の表記。

非常に恥ずかしいが、朝の支度中に突然誤召喚されたため、僕はパジャマ。

桜とひまちゃんは制服のままだ。

地面が柔らかい芝生のため、立ててはいるが、靴下しか履いていない。

加護を授けるのならば、一緒に服も用意してくればよかったのにな。

僕たちは必要なものを話し合い、ユグドラシルさんに作ってもらうことにした。

「まずは家だな。ユグドラシルさん、間取りを考えるので少し時間をください」

「では、私がヒマワリ様と遊んでおきましょう」

「ありがとうございます。僕のそばから離れないようにだけお願いします」

ユグドラシルさんは信用できる。

ひまちゃんにもずっと優しい表情を浮かべているし、この世界にも詳しい。

それに僕のパッシブスキルに書かれてた直感というスキルのおかげか、ユグドラシルさんが戦いにおいても圧倒的に強いことがなんとなく分かる。

「不思議だね。ひまちゃんが加護のおかげでダメージを受けないと分かっているもやっぱり離れるのは不安なんだよな」

「うん。私も同じこと思った」

桜も僕と同じことを思っていたようだ。

精霊がそばにいても、チート級の強さや加護を手に入れても、僕と桜のひまちゃんに対する過保護さは変わらなかった。

「ヒマワリ様。お絵描きなどいかがでしょう？」

そう言うとユグドラシルさんは、手のひらから木の枝を生やし、ひまちゃんに手渡した。本当に植物の精霊なんだな。

「わー！ ありがとうー！」

ひまちゃんはそれを見て喜んで地面に絵を描き始めた。

いつまで持つか分からないけど、一旦は機嫌よく遊べそうではよかった。

「このこはねえ。ぼち。このこは、たまっているの」

「ふふふ。ヒマワリ様は絵がお上手ですね」

犬と猫を描いたのかな？

ここから見えにくいけど、褒めたくなる気持ちはすごく分かる。

「ねえ蓮兄。ひまちゃん、すごいドヤ顔してるね」

「うん。ユグドラシルさんは幼稚園の先生みたいだね」

機嫌のよさそうなひまちゃんの声を聴きながら、遊びに飽きが来る前に、僕たちは早速家の間取りの思案を開始する。

まずは立地の確認だ。

そばには湖。

足下は、地面の見える所もあるが柔らかい芝生のような草が茂っていて、スズランのような白い小さい花も所々に咲いている。

湖から五十メートルほど離れると見慣れぬ木々が生い茂る森がある。

「湖側と森側の両方に入り口を用意した方がよさそうだね」

僕がそう言うと桜は頷いた。

初めに想定したのは今後の生活の流れと、それに合った動線だ。

現状、生活をしていて向かう先は湖と森しかない。

ユグドラシルさんは野菜は作れると言っていたので、食料で困るのはタンパク源、つまり肉だな。まだ未確認だけど、肉を手に入れるなら湖か森で魔物を狩らないといけないだろう。

獲物はアイテムボックスに入れられるため、大きな荷物にはならないが、湖側と森側の両方に入り口があれば、迂回せずに済む。

もし魔物に追われていたって、どちら側からでも家の中に駆け込むことができる。

「日本の梅雨みたいな季節があったら、湖が氾濫するかもしれないから少し離しておく？」

「そうだね」

桜は本当に頭もいい。

この世界への順応も早く、言うことも的を得ている。

「ユグドラシルさん。僕たちにも木の枝をもらえませんか？」

「はい、どうぞ」

僕はユグドラシルさんから木の枝を受け取り、湖と森の中間地点におおよそ十メートル四方の角形を描き、家の場所を決めた。

「建築の知識はないから、間取りはシンプルにしておこう」

「うん。土地はあるんだし平屋でいいよね」

湖側と森側に入り口の印をつけ、描いた四角形の中に、線を引いて間取りを書き込む。キッチン、ダイニング、それぞれの寝室、トイレ、風呂。

「あ。玄関は段差がある方がいいかな」

「うんうん。ひまちゃんが座って靴を履けるもんね」

僕と桜はどんだん案を出し合い、地面に書き込んでいく。

「私とひまちゃんは同じ部屋でいいよね。少し大きめにしちゃうお」

「せっかくだし、桜とひまちゃんの部屋以外も全部大きめにしちゃおうか」  
そう。

土地はあるし、僕たち以外に誰もいない。

せっかくの異世界。これくらいは好きにしよう。

部屋もベッドも脱衣所も浴槽も全部大きめだ。

それにしても、なんだか新婚夫婦が注文住宅の話し合いでもしているみたいだな。

「よし。こんなもんな。ユグドラシルさん、家を建てるのをお願いできますか？」

「じゃあ私はひまちゃんと遊んでるね」

桜はさつとひまちゃんのところに行き、一緒にお絵描きを始めた。

その間に僕はユグドラシルさんに地面に描いた家の間取りや、風呂やトイレの構造を説明。

この家の構造で特に課題なのはキッチン、風呂、トイレの給水と排水だ。

「かしこまりました。では、こちらの間取りのようになっていますね。水やゴミに関しては案がありますのでご安心を。少し下がっててください」

そう言うとユグドラシルさんの優しい雰囲気が一変。

凜とした表情で何も無い空間に手をかざすと、大きな力の流れを感じた。

次の瞬間。

地響きを立てながら、巨大な木が生えた。

揺れを感じたのは、その巨木が急速に地に根を生やしたからだろう。

周辺の木々の倍くらいの高さで葉が生い茂っており、大地には太い根が見え隠れしている。

モンキーポッドのような大樹だ。

幹は太く直径十メートル以上はあるだろう。

説明をしているときに伝えた通り、大樹の根本には三段の階段があり、その階段をあがった先にある幹の下の部分にドアがついている。

「すっげえ！これが魔法かあ！」

僕が感心していると桜とひまちゃんが駆け寄ってきた。

「おっきー！」

「本当にすごいね！ねえ、ユグドラシルさん。私もこんなの出来るのかな？」

「いえ。植物魔法は私の眷属にのみ許されたユニークスキルなのです」

確かにさつっきの説明で属性は十一種類とは聞いていたが、その中には植物という属性はなかった。

魔物の中にもその個体だけが持つスキルがあるのかもしれない。  
もし魔物と戦闘になったら気をつけなさいと。

「さっそく中に入って、ご確認いただけますか？」

「そ、そうですね」

魔法のない世界から来た僕たちにとつては感動的な光景だったけど、ユグドラシルさんにとつてはいつも通りに植物魔法を使ったっていうだけなんだろうな。

「ひいちゃんが、いちばん！」

「ちよつと待つてね。せつかくのお家が汚れちゃうから」

急いで家の中に入ろうとするひまちゃんを僕は止めようとした。

なぜなら、僕たちはこの世界に来てからずっと靴下のままだ。

なんなら僕に至つてはパジャマのままだ。

新築しんちくの家の中を汚れた靴下で歩き回らせるわけにはいかない。

「汚れを気にされているんですね。それでは……」

ユグドラシルさんが汚れた靴下に手をかざすと、靴下が優しい光に包まれた。

光が消えると、汚れた靴下が新品のように綺麗になっていて、僕と桜は驚き顔を見合わせた。

「わーい！ きれいになった！ ありがとう！」

「ふふふ。靴は中に用意してあります。後で履いてみてください」

ひまちゃんは理屈がなくても飲み込めるかもしれないが、僕と桜にとつては『急に汚れが消滅し

た』という超常現象だ。

「人間には浄化クリンと呼ばれている光属性の簡単な魔法です。後でお教えしますね」

汚れを消滅させられるなんて、小さな子供がいる家庭では最高に重宝ちゆうぼうする魔法だ。

是非とも覚えなくては！

「あ……僕つて光属性の適性ないんだつた……」

「だ、大丈夫。私に任せて」

また桜にフォローされてしまった。

魔法が発達したこの世界において、僕は早くもみんなの足を引つ張つてしまっている気がする。

兄としては少し情けないが、向き不向きは誰にでもある。

そうだ。僕は僕に出来ることをして、できないことはみんなを頼ればいい。

「ごめ……ううん。ありがとう。魔法のことは桜にお願いしますよ」

「うん！ 任せて！ 力仕事は蓮兄に頼るね！」

謝罪よりも感謝を口にしてよかった。

桜も頼られたことで、気まずい表情から嬉しそうな表情に変わっている。

「ひまちゃん。中に入るときはここを横に動かすんだよ」

気を取り直し、僕はひまちゃんに家の入り方を教えた。

ドアの構造はシンプル。

開けるときは小さな持ち手を横に動かすだけ。

開めるときは持ち手を逆に動かせば中にある木の棒が門かどの役割で幹に刺さり、扉が前後に開閉しなくなる。

「あい！」

ドアの開け方を理解したのか、ひまちゃんは大きな声で返事をした。

周囲にも魔物もいないため鍵をかける必要はない。

小さな持ち手の仕組みは風などでドアが勝手に開閉しないようにするためだけのものだ。

「うーんしょ！」

ひまちゃんにとつては少し持ち手の位置が高かったかな。

いや、すぐに大きくなるだろう。

「うんうん。上手にできたね。開けてごらん。新しいお家だよ」

ひまちゃんは教えた通りの手順で持ち手をスムーズにスライドさせ、問題なくドアを開けることができた。

中に入ると、木の優しい香りが出迎えてくれた。

幸せな新生活の始まりだ。

新しい世界。

新しい家。

「わあ！ おっきいね！」

「かわいい！ 妖精さんの靴みたい！」

中に入って最初に目に飛び込んだのは広い玄関と、足元に置かれた木で作られた三足の靴。

「ありがとうございます。なんてお礼を言ったらいいか」

「お気になさらないでください。守護者として当然のことですので」

僕が感謝の言葉を述べると、ユグドラシルさんは優しくそう返した。

豪邸ごうていに最強の守護者。

なんだかお金持ちになった気分だな。

「ひまちゃん、ここに座って、靴を履いたり脱いだりするんだよ」

「あい！」

「玄関も広くして正解だったね。四人一緒にいても全然ぶつからない」

桜がそう言うのも無理はない。元の家は玄関が狭く、靴を脱ぎ履きするときには順番にしかできなかった。か

しかし今は四人が同時に玄関に入っても渋滞しない、快適な広さだ。

玄関を見た後に、僕たちは靴を履いてみた。

「すごい。履き心地最高だ」

「これだったら全然疲れないかも！」

僕と桜は靴の履き心地に感動した。

ひまちゃんに至っては今にも走り出しそうだ。

靴の良し悪しは子供の成長を大きく左右する。